ジュエリーデザイン教育

Jewellery Design Education

荒川芳秋
Yoshiaki Arakawa

1.はじめに

「名古屋造形の沿革」2008年4月名古屋造形芸術大学を名古屋造形大学に校名変更し、17コース・クラス編成に改編され、新しく「工芸コース・ジュエリーデザインクラス」が新設されました。2009年4月より「ジュエリーデザインコース」に改編され現在に至り、ジュエリーデザインの単独コースは海外の教育機関にはありますが、日本の美術系大学では工芸コース、金属造形（金工）コース、彫金コースの中に組み込まれていて「ジュエリーデザインコース」としては、大学では日本初の新設コースであります。

名古屋造形大学におけるジュエリーデザインの教育とはジュエリーデザインのジャンルの発展を通して産業・文化に貢献する人材育成を目指して、芸術界で創作に励み独自の感性を磨きあげる作家、宝飾業界で活躍する人、大学など全国各地の教育研究機関において後進の指導をする人などを国際性を高めて社会に送り出すことであります。

ジュエリーデザイナー、ジュエリーアーティスト、ジュエリーアドバイザー、ジュエリーエンジニア（CAD）、クラフトマン、ジュエリーコーディネーター、教育者など、ジュエリーに関する職業に専従することに関しての参考資料として、40年近くの経験の実務資料などを紹介しながら、ジュエリーデザインの全般を解説します。

ジュエリーデザイン概論

1）日本のジュエリー（装身具）デザインの歴史

○縄文時代の装身具（B.C.4000頃）

日本人の装身具の歴史に、最初に登場するのは、縄文人がした入れ墨と鋸歯（のこぎりの歯）加工である。これは重要な装身の手段で、装身具へのその後の強い関心が湧き起こった。

装身具としては耳飾り、腕輪、垂飾り、髪針、櫛などがある。耳飾りには二種類あり、輪の一部に切れ目のある玦状耳飾りと、滑車状の環状耳飾りがあり、石あるいは粘土製のものです。腕輪は貝輪で、櫛は動物の骨か漆を塗った竹でできで、装飾が施されている。

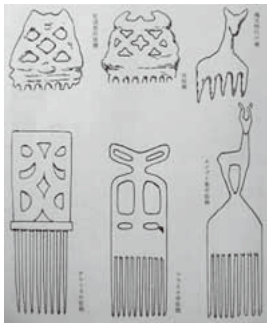
○弥生時代の装身具（西暦１頃）

この時代は青銅器文化が入ってきた時代である。青銅器は銅と錫とを混ぜた合金で器物を作ったもので、大陸から伝わった新しい技術であった。それで貝輪の形を銅で模したものが有鈎銅釧（ゆうこうどうせん）と呼ばれる腕輪が登場する。他には、マキガイや鹿の角で作った指輪が発見されている。装身具の遺品は案外少ない。これは装身欲が衰えたというより、くさりやすい材料を用いたために、不幸にして遺品がまだ十分に発見されていないためであろう。

1. 入れ墨と鋸歯加工

2. 玦状耳飾り

3. 環状耳飾り、骨角器、土偶



4. 縄文時代の櫛

5. 有鈎銅釧

○古墳時代の装身具（400 ～ 600頃）

この時代は朝鮮との交通も盛んになり、大陸の文化も続々と紹介され、国内も豪族を中心にして強力な集団社会を統一して、次第に国家的体制を整えようとしていた時であったから、生活文化も急速に発達し、装身具もまた面目を一新する花やかさを示すようになった。古墳時代のジュエリーで、最も人目を引くのは、玉（ぎょく）と呼ばれる物。玉は陸から産する玉石（ぎょくせき）と海から採れる真珠とのことである。玉石は翡翠、ガラス、水晶、瑪瑙、琥珀などが含まれ、形としては、勾玉（まがたま）、管玉（くだたま）、切子玉（きりこだま）、棗玉（なつめだま）、臼玉（うすだま）などがある。もう一つの特徴は朝鮮や中国より渡来品で、金あるいは銅に金をかぶせた細工品の耳飾り、指輪、冠、帯金具、佩飾（はいしょく）などが登場する。

○飛鳥・奈良時代の装身具（600 ～ 700後半）

飛鳥時代以後は、仏教にともなって大陸の文化が急激に流入し、生活文化にもいろいろの変化があった。しかし装身具に関し

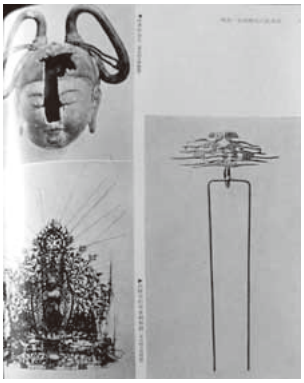
ては、かえって前の時代よりも衰退してゆく。

衰退の原因としては1）王権が伸長し、豪族たちの勢力を弱めようとしていた時で、庶民の華美な装身具を抑制。2）権者や富者の生活内容が充実してきたため、自分の肉体だけを飾り立てる原始的な装身を必要としなくなった。3）新しい異国的装身具のために、従来の伝統的な装身具が時代遅れのものと考えられてきた。4）服装における染織技術の発達が、これまでほど装身具を必要としなくなった。これらが考えられる。

6. 玉石

7.耳飾り：細金細工（粒状や線状の金を炎でろう付けした精巧な技巧でできた朝鮮からの渡来品）

8.衣服令の制定：冠位十二階を定め高価な冠よりも官制による冠色により王権の強化。聖徳太子像



9.法隆寺伝来金銅製簪、伎楽（くれ）面、不空羂（けん）索観音の宝冠

○平安時代の装身具（800 ～ 1100頃）

この時代は泰平が続き、権威を加えた藤原氏を中心に花やかな宮廷生活が行われ、貴族時代にもかかわらず装身具は用いなかった。この時代の貴族が男女とも唐風の服装から脱して、日本的な束帯、直衣（なおし）、十二単衣（じゅうにひとえ）式に、女子が長い間の結髪の風をすてて垂れ髪（たれがみ）にしたことは大きな変化である。その服飾変化の源は都を奈良から京都へ移すという大事業を行い、奈良の華風に対する批判と財政の立て直しを考えた時であるから、装身の簡素化が唱えられたと察することが出来る。

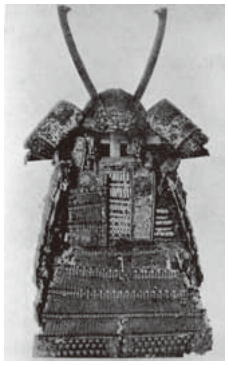
平安時代における扇の発達は装身具としての効用は大きいものがあった。

10. 十二単衣

11.中国伝来の扇を日本でたたみ扇に発達させた檜扇（ひおうぎ）。他に団扇（軍配に用いられた）、紙扇（平安時代の上下の階級に愛用された重要な装身具）がある。

○鎌倉・室町時代の装身具（1200 ～ 1500頃）

装身具の歴史から見ると、この時代は不毛の時代であった。質実をよしとした武家の時代、虚飾よりも実質的なものを望み、活動の自由なことを求めた時代で、長い袖、長い裳（も）を捨て、重ね着を廃して、小袖という軽装に転じた時代である。服飾に簡素化を求めた時代であるから装身具を排除した。この装身具不毛の時に、ひとり研を競ったのは武家の晴着である甲冑（かっちゅう）であった。それは純然たる装身具ではなく、武具である。



12. 赤糸縅鎧

○桃山・江戸時代の装身具（1570 ～ 1860頃）

・今までの権力に従属していた生活から、次第に個人を重要視するようになり、それがやがて自己を飾らせることになった。

・長い間の国内の争乱が終わり、天下は統一されて泰平の世を迎え、人々は久しく見失っていた身辺を飾ることに新しい喜びを

見出した。

・社会的秩序の一新された時代で、少しも過去の伝統や風習に束縛される必要がなく、各自がその能力に応じて、好みを大胆自由に発揮できた。

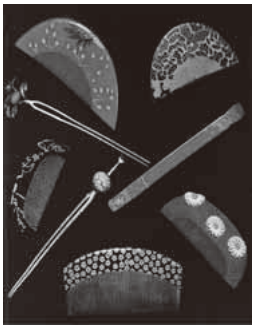
・十六世紀におけるポルトガル人の渡来によって、西欧の風俗が知られたことや、十七世紀の朝鮮の役に外地に出征したことによって知った異国の風俗が、さらにこの時代の服飾界に大きな刺激を与え、新しさを示させる。

・近世における庶民階級の台頭。彼らの教養は低かったが、拘束されない奔放さは、装身にも情熱をそそがせた。彼らの歓楽場であった遊里や劇場は新しい服飾の温床となり、また伝達場所となった。その結果一般の服飾がはなやかになっただけでなく、結髪の驚異的な発達にともなって各種の髪飾りが生まれ、印籠（いんろう）や煙草入れなど、誇るべきこの時代独自の装身具を発達させた。しかもそれらが高度な意匠と技巧とを示していることは、この近世は鎖国の時代であったが、国内的に生活力の充実がしていたことを知らせる。

これまでを考えてみると、古代の日本人は身を装うことに熱中したのであったが、その欲望はいつか一部の支配階級のみにまかせられ、大衆は満たされぬままに放置されていた。しかしいまは大衆がその人間的な喜びを再び取り戻した。

13.印籠：武士が携行薬を入れて腰に下げたもので袴を着用した場合必ず持つ装身具

14.喫煙具：武家階級に張り合い町人階級で発達した煙草入れ



15.櫛（くし）、簪（かんざし）、笄（こうがい）

16.簪（結髪が発達し、耳掻きをつけ、二股脚に作る）

○明治時代の装身具（1868 ～ 1912）

明治政府の散発脱刀令と洋装化。明治5年（1872）に西洋式の大礼服、通常服が定められた。フランスより天皇の大礼服用の金製ボタンが皇后の「腕釧（ブレスレット）」、「簪（髪飾り）」と共に届けられた。明治9年（1876）帯刀禁止令が布告され、これまで刀の鍔や目貫など装剣金具を作ってきた工人たちは職を失うこととなり、その中には帯留や指輪などの装身具に活路を求めた者もいた。

洋装化は鹿鳴館時代が政府の欧化政策の象徴であり、男性が主導していた面が強く、女子の洋装化の服制は明治19年とかなり遅れた。トレーンを引く公式儀式用の大礼服マントー・ド・クール、イヴニング・ドレスである中礼服ローブ・デコルテ、その略式の小礼服ローブ・ミーデコルテ、昼間用の通常礼服ローブ・モンタントが定められた。男性用の懐中時計は明治5年の太陽暦制定以降、急速に広まった。明治10年の西南戦争を経て、明治22年に「大日本帝国憲法」を発布。ここにおいて明治政府は国家として体制をほぼ固めた。この頃、国内のジュエリー産業が産声を上げた。

明治後期の特徴のひとつとして、文明開化のモチーフや慶事の記念を謳った装身具類がある。明治22年「大日本帝国憲法発布記念章」の記念メダルの始まりから、「両陛下銀婚式」や日露戦争の戦勝の指輪、帯留、簪が作られ、この流行は続いた。

17.明治天皇の御真影

18.皇后御真影、ティアラと三連のダイヤモンド・リヴィエールは19世紀後半の典型的デザイン

19.駐英大使の令嬢肖像 明治末ー大正

20.令嬢が使用したジュエリー（イギリス製）明治末ー大正

○明治後期から大正（1912 ～ 1926）時代の装身具

明治38年（1905）、御木本幸吉の真円真珠養殖成功は歴史的な功績であり、大正期には日本を代表する輸出産業にまで成長した。

御木本真珠店は大正6年に皇后陛下第二公式ティアラの御用命を拝受するなど、輸入品の独壇場であった高級ジュエリーまで手がけるようになった。

このほかの百貨店を含む、多くの宝石店もかつてないほど多彩なジュエリー・装身具を提案し、本格的な日本製ジュエリーの時代が幕を開けた。

サラリーマンにスーツが浸透したことにより、男性用ジュエリーではネクタイピンやカフスボタン、シガレット・ケースなどが普及し、第一次世界大戦後は男女とも腕時計が広まってくる。

女性の服装も洋装化が普及し、髪型が大きく変化した。べっ甲は引き続き人気の高い素材であったが、特に束髪簪はこの時代に流行した。

彫金の装身具も高級品として人気が高かった。

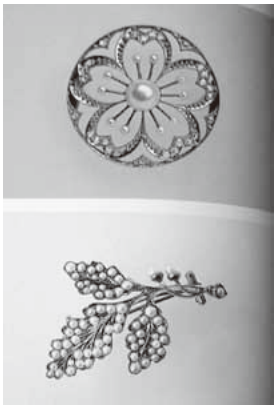
大正前期の装身具はアール・ヌーヴォーの影響があり、デザインにおいて明治期に比べて自由な造形が特徴で、軽快で洗練されたものとなった。

大正14年（1925）にアール・デコ（現代装飾美術・産業美術国際博覧会）博覧会がパリで開催された。これは1910年代から30年代のファッションや建築ほか、様々なデザインや美術表現に共通に見られ新しい造形傾向のこと。モダニズム絵画の影響を受けた細部の省略や幾何学的なモチーフ、およびその反復、コントラストの強い色彩などが表現上の特徴である。

○昭和時代の装身具（1926 ～ 1989）

大正末から昭和初期にかけてのアール・デコのデザインは、宝石と貴金属を使った高級なジュエリーに影響を与えた。最大の特徴は宝石の使い方にあった。エメラルド、あるいはサファイアを並べてカリブル留めにして、ダイヤモンドとの色彩のコントラストを強調した。ダイヤモンドはブリリアントカットばかりでなく、長方形のバケットカットをはじめとした様々なカットのものが使われた。また、オニキスもこの時代の特徴的な素材で、ダイヤモンドとの組み合わせで使われた。エメラルドやサファイアの代わりにヒスイが使われることもあった。

地金はプラチナ、またはホワイト・ゴールドである。金色好みの明治・大正前期とは対照的にアール・デコは白い金属の全盛時代で

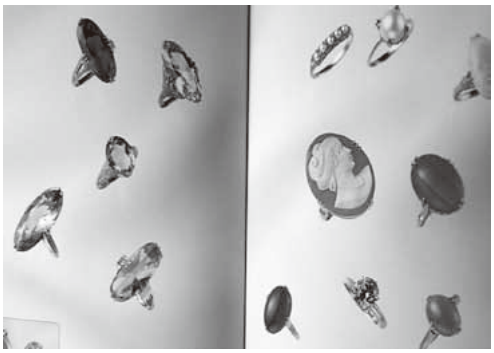


21.桜をモティーフとした帯留、明治41年－45年。「下」ケシ珠の小さな真珠を立体的に組み上げたブローチ

22.アール・ヌーヴォーの非対称性が取り入れられた金製の束髪簪脚は銀に金めっき

23.アール・デコ様式のジュエリー。黒色で平面的なオニキスは効果的なコントラストを作り出す素材としてアール・デコ・ジュエリーに好んで用いられた

24.昭和初期アール・デコ様式の指輪。落ち着いた色彩のサファイアとダイヤ、プラチナを組み合わせた。宝石のカットも四角、長方形、三角形とデザインの幅が広がった。



25.昭和30年頃から再び合成宝石を用いた18金などの指輪が作られ始めた。

あった。

アール・デコの影響でクリップの登場がある。これは帽子や襟などに付けるものであったが、組み合わせてブローチにできるようになっているものも多かった。帯留にもクリップ兼用のものがある。

昭和6年（1931）に満州事変が勃発する。日本白金協会が昭和10年に設立され、市民の財布でプラチナを備蓄し、戦時に備えることを目的とした。昭和12年、日中戦争に突入。政府はプラチナ、9金以上の金の使用を禁止する政策を行った。

昭和15年金製品の強制買い上げが行われ、昭和16年に真珠湾攻撃から対米戦争へと突入し、貴金属の供出が行われ、明治維新以来培われてきた技術と美意識が葬り去られることになった。

太平洋戦争後、一時の空白期間があったものの昭和30年代になって、宝石や金製品の輸入自由化が実現されることになる。

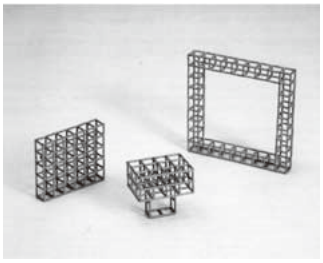
○コンテンポラリー・ジュエリーへの道

昭和6、7年頃から指輪を制作し始めた奥村博史の指輪は後の世代に影響を与えた。

26.奥村博史の指輪

27.菱田安彦のブローチ。彫金

28.岩倉康二のブローチ。ロストワックス（精密鋳造）



29.平松保城の（左）ブローチ、リング、ブレスレット、（右）リング。ろう付け組立

昭和31年に内藤四郎、後藤年彦、増田三男、若林作司、岩倉康二、菱田安彦、黒木絢子、森田麗子の八名を創立会員として、URアクセサリー協会（後にURジュウリー協会）が発足した。
それまでの西洋式ジュエリーや日本の装剣金工の造形と一旦決別、ここに現代への出発点を見出すことになる。

菱田安彦はURの立ち上げほか多方面に尽力しただけでなく、ジュエリーの文化性と芸術性を広く訴えた。その後、コンテンポラリー・ジュエリーへの指向を強めた。

昭和39年（1964）に作家の自由な造形による芸術表現を目指し菱田安彦を中心に岩倉康二、平松保城、山田禮子ほかで日本ジュウリーデザイナー協会が発足した。

初期の日本ジュウリーデザイナー協会は展覧会活動を中心に置き、ジュエリーにおけるデザインと彫金技術の質の重要性を訴えた。当時はこうした新しいジュエリーをモダン・ジュエリーと称したが、後にコンテンポラリー・ジュエリーの名称が世界的に一般化する。多くの作家が活躍し、作品は欧米の思想を吸収したものであったが、彼らの多くが伝統的な江戸彫金の技術を継承した東京藝術大学の彫金出身者であったから、自ずと日本独自の彫金技術の重要性が見直されることになった。

○昭和35年（1960）高度成長期から平成2年の装身具

高度経済成長が始まる。

昭和35年（1960）日本製の宝飾用鋳造機第1号のデモンストレーション。

昭和36年（1961）宝石類、ダイヤモンドの全面的輸入自由化となった。この頃、真珠産業が「輸出の王」として注目される。

昭和42年から（1967）デ・ビアス主催のダイヤモンド・インターナショナル賞。国内ではダイヤモンドデザインコンテストが盛んに開催された。

昭和45年（1970）第1回国際ジュウリー・アート展が開催。北欧、ドイツ、イギリス、スイス、イタリア、フランス、アメリカ、日本と世界のジュエリー界の第一級作家たちによる秀作を一堂に集めて開かれ、ジュエリーが骨とう的、財産価値ではなく、美しさによってこそ価値づけられるものであること認識される展覧会であった。

昭和58年（1983）ダイヤモンドの消費量の関税が撤廃されたことと景気の上昇が重なって、ダイヤモンドの消費量は急上昇した。プラチナ消費世界一。男女雇用機会均等法の施行以降、女性の社会進出が促進されジュエリーの自己購入が増える。

平成2年（1990）には平成のジュエリーブームが起きる。世界の生産量の30%のダイヤモンドを日本で消費（アメリカに次いで世界第2位）。90～91年バブル期にかけて、3兆円弱のサイズま

で拡大した後、91年バブル景気崩壊により、2006年での推計市場は1兆2,000億円強まで縮小したと推定される。

30.デ・ビアス主催ダイヤモンド・インターナショナル賞受賞作品

31.モダン・ジュエリー
第1回国際ジュウリー・アート展
ネックレス　アンドルー・グリマ
西部百貨店〈渋谷店〉

32.コンテンポラリー・ジュエリー
第3回1976国際ジュウリー・アート展
ジュウリー大賞ネックレス
シルバー、絹　中山あや

○平成3年(1991)バブル景気崩壊後から現代におけるジュエリー

平成3年(1991)バブル崩壊により、ジュエリー業界打撃。ダイヤ・色石などの輸入実績が約30%減。

シルバーブームの火付け役となったクロムハーツ、コム・デ・ギャルソンが日本に紹介(翌年、ユナイテッド・アローズが代理店となり日本市場参入)。特に若者層を中心にアメリカの流行を移入した新しいタイプのケルトの組紐文様やクロス(十字架)、スカル(どくろ)などをモチーフにした象徴的な意味を重視したシルバージュエリーの流行が起きる。

平成7年(1995)「コンテンポラリー・ジュエリー」展が東京国立近代美術館工芸館で開催され、欧米のコンテンポラリー・ジュエリーの影響を受けた。当時のバブル経済下の市場では、ジュエリーを使われている素材の希少性や大きさで価値付けるという傾向が顕著になっていたこともあり、これに反発し、ジュエリー特有の素材価値や身体性などをテーマによりコンセプチュアルな表現が強くなった。

1980年代からの美術の分野でモダン・アートからコンテンポラリー・アートという言葉が使われるようになったのと同様に、ジュエリーの分野でもモダン・ジュエリーからコンテンポラリー・ジュエリーと呼ばれることが世界的に一般化。

平成8年(1996)銀座に海外の老舗宝石店であるティファニー、カルティエ、ブルガリ、ハリー・ウィンストン、ショーメなど代表的な宝石店が出店。

女性の社会進出が促進され、自分自身で得たお金で、自分のためにジュエリーを購入する時代が訪れた。

現代の宝石市場は①若者市場②ブライダル市場③新規富裕市場④本当の富裕市場と分類され、全体市場を、約1兆2,000億円強とすると、③と④の富裕市場で約6,000億円、①と②の若者を対象とした市場が約6,000億円である。現代では刻々と世界の政治・経済情勢と連動しながら、ジュエリーは社会性や財産的価値という見方から自由になってきた。

33.高度成長期、岩倉康二　フランス(パリ)で個展。ワックス、彫金

34.1996年「石川暢子作品集」発行
25年間に創作した代表的作品集

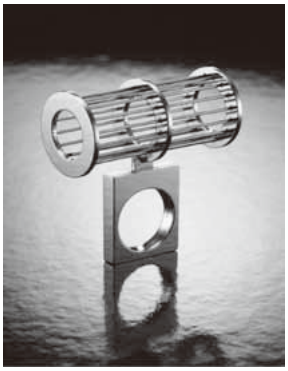
35.平成16年(2005)「宝石の四季」
表紙に荒川芳秋作品掲載。
個人ブランドが脚光あびる

36.2006 日本ジュエリーアート展大賞
北田美千枝　K18.プラスチック.宝石

2）ジュエリーデザイナー・荒川芳秋の制作活動

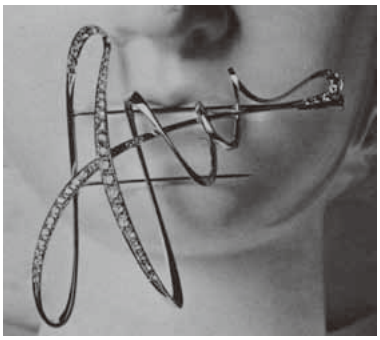
1972年 武蔵野美術大学産業デザイン学科工芸工業デザイン専攻卒
1983 ～ 2007年 豊橋技術科学大学建設工学科非常勤講師
2011年1月現在
・（ JJDA）社団法人日本ジュウリーデザイナー協会副会長
・（JCDA）社団法人日本クラフトデザイン協会正会員
・名古屋造形大学ジュエリーデザインコース客員教授

大学3年生より菱田安彦教授のもとで彫金を学び、3年生よりコンペティションに応募し、社会に発表することを教授より勧められた。基礎的技術を身につけながら、斬新なデザインを発案するために、資料集めをしっかりしてからアイディアスケッチをして、モデル制作をしてから実制作をした。デザインのコンセプトを重要視して、自ら作業し、納得のいく作品を完成させた。大学で教務補助を1年勤務してから、ジュエリーデザイナー岩倉康二氏のもとで3年勤務。現場で学び、二つの受賞を受け、ジュエリーの仕事に導かれた。

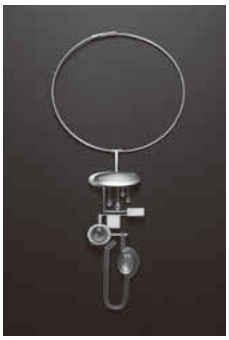


37.1971年武蔵野美術大学
4年生時の作品リング
シルバー

38.1971年第2回金属洋食器デザイン
コンペティション通産大臣賞受賞
シルバー



39.1974年ダイヤモンドデザインコンテスト
D部門第2位受賞ブローチ
ホワイトゴールド、ダイヤモンド



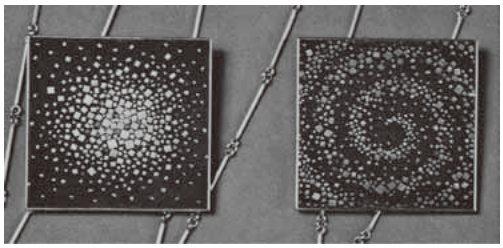
40.1974年日本ジュウリー
展ジュウリー大賞受賞
ペンダント　ゴールド、
ムーンストーン、オパール、カルセドニ、ダイヤモンド、象牙

岩倉精密鋳造研究所（社長　岩倉康二）で3年の勤務であったが、デザイナー、クラフトマン、営業とあらゆる業務に携わり、ロストワックス（精密鋳造）の全てを経験する。

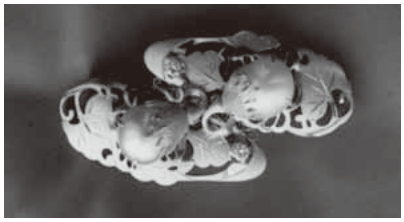
会社勤務で、個人の作品作りやコンペティションに向けての作品作りを継続するには無理が出てきたために、個人になって独立をすることで地元の春日井市に戻り、スタジオ・メイを立ち上げた。日本ジュエリーアート展、日本クラフト展に入選を重ね、JJDA、JCDAの正会員になった。

独立当初、名古屋の（株）伊東屋 伊藤 巧社長より仕事を頂き、宝石業界の道徳を教わる。

その後、菱田安彦教授の紹介で京セラ株式会社　宝飾事業部大芝様との出会いで、会社契約にて高度成長期からバブル期（1986 ～ 1991）の16年間ほど、クレサンベールの商品開発に参加、オリジナル商品を大量生産と一品制作の商品を納めた。



41.1977年日本クラフト展入選作品。鉄地に金箔、銀箔、プラチナ箔、銅箔、を布目象嵌ブローチ



42.1985年（株）伊東屋に納品の帯留め。
プラチナ、白蝶南洋真珠、ダイヤモンド

43.1976～1992年京セラ株式会社クレサンベールとの取引作品の一部。四季をテーマにブローチ、帯留め、ペンダント

44.1990年京セラ（株）クレサンベール高額商品の作品。ネックレス　プラチナ、ゴールド、アレキサンドライト、エメラルド、ルビー、サファィア、ダイヤモンド

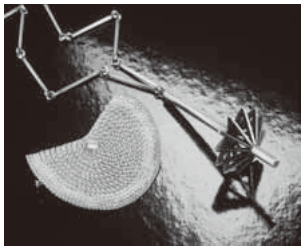
1990年頃のバブル期に（株）伊東商店社長 伊東善一郎様より参加依頼があり、名古屋キャッスルホテル（現在は名古屋ウェスティンホテル）での催事に参加。お客様はデパート、小売店のVIPなジュエリーが好きな方で販売価格が20万円～ 100万円位のジュエリーが飛ぶように売れていた。2日間の会場には約5,000人ほどの来客数があり、海外ブランド、メーカーブランド、ジュエリーデザイナーズブランドと識別され、我々の個性的なデザイナーズブランドは7名ほど参加、一人100点～ 200点位出品して、一般商品とは違った楽しい作品が、多くのファンに支えられて実績を伸ばした。販売にはデザイナーが接客し、作品のコンセプトを説明しながら販売につなげた。

1990年から毎年、奈良の「ギャラリー藍倉」で個展を開催。2010年で20回目の個展を行った。固定ファンに支えられ継続が出来た。シルバーからゴールド、プラチナ、宝石と幅広く作品の種類を変化させた。固定客が多いため、お客様の特徴・ファッションを考慮しながら、新しい提案作品を制作した。

2000年7月～ 2010年3月JR岐阜駅アクティブG内にて「ジュエリースタジオ岐阜」を開設。彫金教室とジュエリーショップを10年間経営する。講師は（社）日本ジュウリーデザイナー協会会員にて指導し、教室に50名～ 70名の会員が通う看板アカデミーであった。10年間で多くのジュエリーデザイナーが育ち、各方面に活躍している。

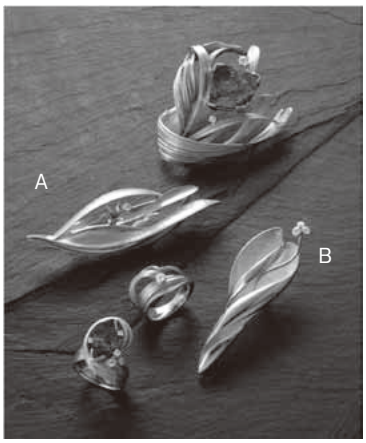
45.1990～2010年約20年間継続中。（株）伊東商店のホテル催事参加作品。宝石、貴金属を使用したオリジナルジュエリー

46.1995年日本クラフト展入選作品。純金、純プラチナブローチ

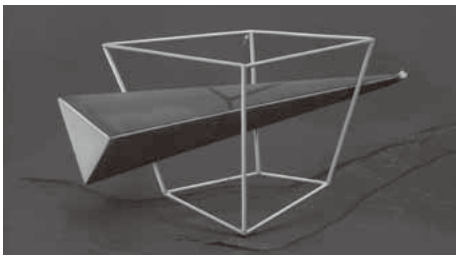


47.1990～2010年ギャラリー藍倉で
20回個展開催。奈良、大阪の固定ファンに支えられた。

2000 ～ 2010年　森ビル都市企画株式会社と私が経営する（有）スタジオ・メイと契約を交わして「ジュエリースタジオ岐阜」を運営した。教室運営、ジュエリーショップ、オーダーメード、商社への卸しと2010年3月にかけて忙しい日々であった、多くの出会いとチャンスがあり、充実した10年であった。

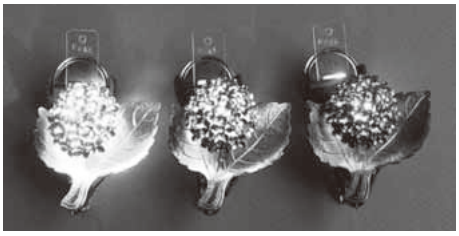


48.2005年
高北幸矢版画＋ジュエリー展に協力参加。A、Bは高北幸矢教授のデザインを立体に起こした作品。　ブローチ



49.2008年日本ジュエリーアート展入選作品ブローチ

50.2008年日本クラフト展出品作品。
ジュエリーデザインコース1年生のロストワックス授業の参考見本作品リング



51.2010年LEDジュエリーブローチ・クリップ
日本街路灯製造株式会社＋（財）中部産業・地域活性化センター＋名古屋造形大学ジュエリーデザインコース産官学連携でLEDジュエリー開発制作してNAGOYAアカリナイトに参加。授業の参考見本作品

2005年には高北幸矢教授が名古屋三越ギャラリーにて個展をされるにあたって、先生のグラフィックデザインを立体にアレンジしてジュエリーを制作した。それらの作品が「2005高北幸矢版画+ジュエリー展」に協力参加が出来、発展のきっかけになった。
2007年4月より名古屋造形芸術大学の客員教授にてジュエリー教育を始める。

2008年4月より名古屋造形大学に校名変更。「工芸コース・ジュエリーデザインクラス」新設の客員教授にてジュエリーデザインの教育の立ち上げに参加することになる。全国で初めての試みである。

2009年4月より「ジュエリーデザインコース」に改編され、現在3年生が就職活動に至るまでになった。

3）ジュエリー産業、ジュエリーデザイナー、教育機関、職業の紹介

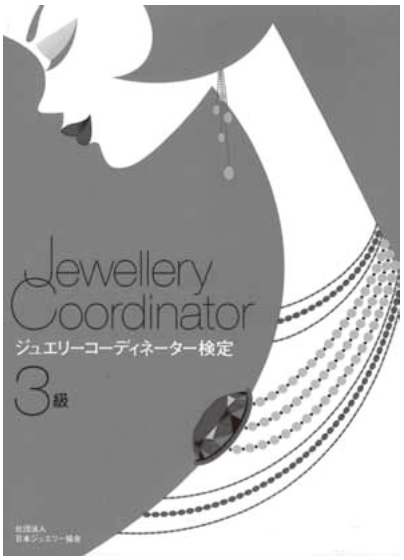
［ジュエリー産業］

社団法人日本ジュエリー協会（JJA）は宝石・貴金属・ジュエリー業界の輸入・製造・卸・小売を網羅した唯一の公益法人。900社ほどの正会員構成で、詳しいジュエリー産業の情報はホームページ参照。

ジュエリーコーディネーター検定3級・2級・1級と検定試験を行い、ジュエリーのプロフェッショナル育成の学科の検定である。

［ジュエリーデザイナー］

社団法人日本ジュウリーデザイナー協会（JJDA）はジュエリー



52.ジュエリーコーディネーター検定3級、2級の取得を在学中に目指す。

デザイナーが所属する唯一の公益法人。正会員503名・賛助会員29社/個人4名（平成22年12月現在）。企業デザイナー、ジュエリーデザイナー、ジュエリーアーティスト、クラフトマン、教育者が所属している。公募展・日本ジュエリーアート展、日本ジュエリーデザインコンペティションを開催し、ジュエリーデザイナーの育成事業をしている。ホームページ参照。

［教育機関］

ジュエリーデザインに関わる教育をしている教育機関は。

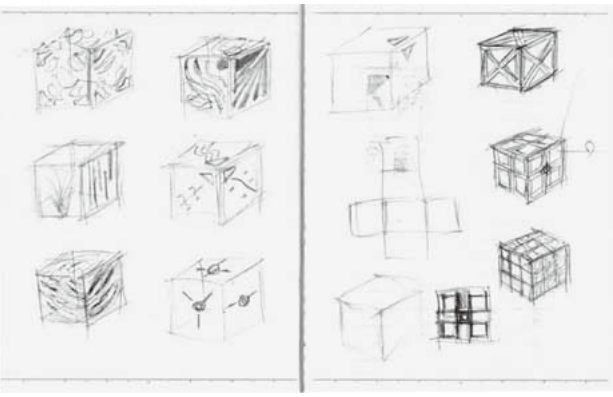
・東京藝術大学工芸科彫金専攻、武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科、多摩美術大学工芸学科、文化女子大学、名古屋造形大学ジュエリーデザインコース、名古屋芸術大学デザイン学部クラフトブロック、大阪芸術大学工芸学科、九州産業大学美術学科、金沢美術工芸大学工芸学科、東北芸術工科大学美術科、富山大学芸術文化学部デザイン工芸コース、杉野学園、山梨県立宝石美術専門学校、専門学校ヒコ・みづのジュエリーカレッジ、山脇美術専門学院、日本宝飾クラフト学院など。

［職業の紹介］

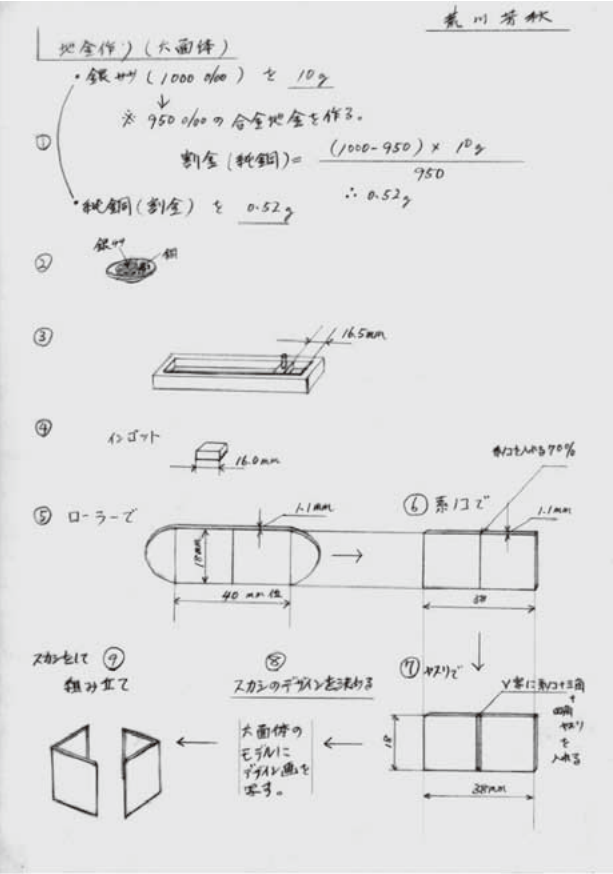
企画・ジュエリーデザイナー（企業デザイナー.自営）、ジュエリーアドバイザー（企業販売部）、ジュエリーエンジニア（CAD）、クラフトマン（企業製造部.自営）、企業総合職・営業、ジュエリーアーティスト、教師、アカデミー講師など幅広い。

53. （社）日本ジュウリーデザイナー協会
創立40周年記念ジュエリーデザイナー図録

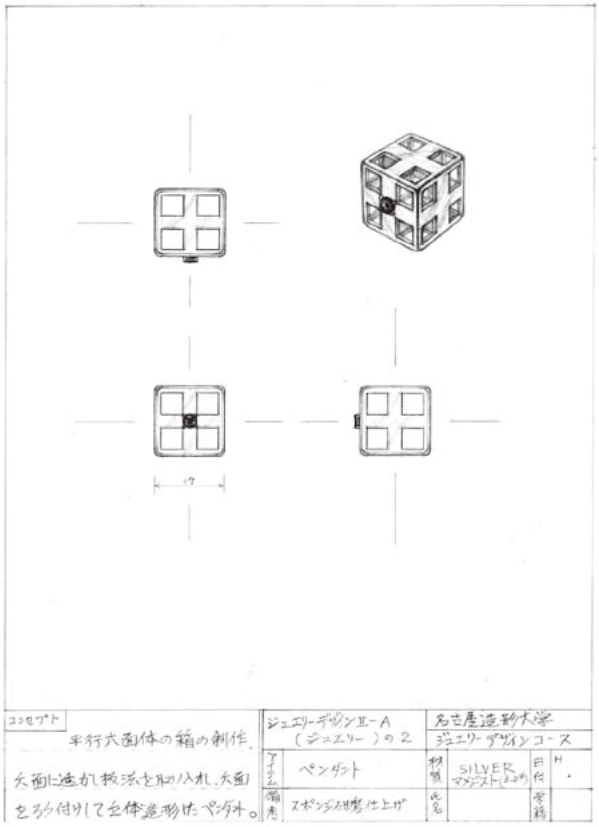
4）意匠設計の方法「手書きデザイン画」



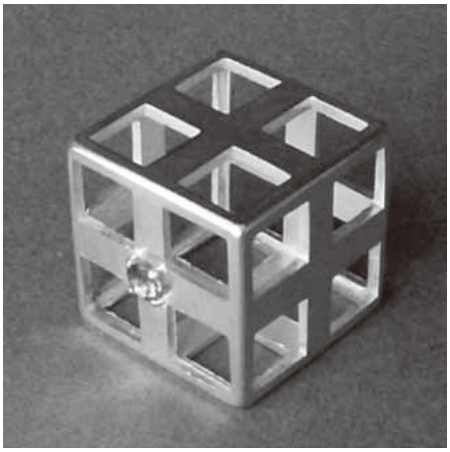
NO1. 六面体ペンダントをアイディアスケッチにて考案する



NO2. 制作工程を考えて実制作にかかる



N03.実寸で三面図と立体図を作成する。ケント紙かトレーシングペーパーに書く



54.完成作品ペンダント　シルバー、アメジスト
1年生後期授業参考作品
ろう付け技法による組立

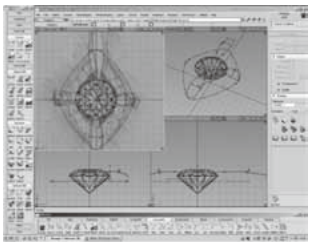
4）意匠設計の方法「コンピューターデザインの2D・3DCAD」
中山順夫

「手書きデザイン画」

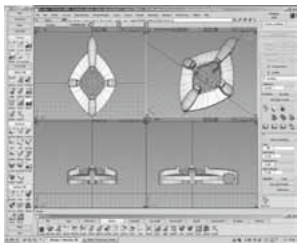
・アイディアスケッチに基づいて、第三角法による正面図、上面図

2D
CAD＋CAMの製造工程
ペンダントなど2.5次元が得意

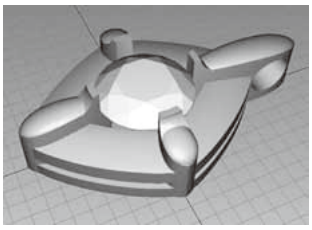
1.ペンダントのデザイン画



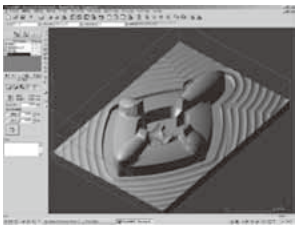
2.ペンダントの基礎部分を描き、
ダイヤのセッティングをする



3.全体図を描く

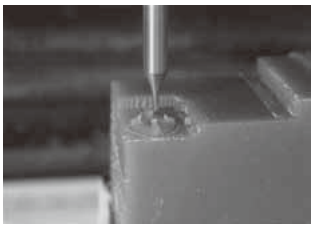


4.ペンダントの完成図



5.CAMの切削完成図

6.CAMの切削機



7.ハードワックスを刃先が丸い、
ボールエンドミルにて切削

8.ワックス原型が出来たら鋳造して、仕
上げ、石留め、完成

（平面図）、右側面図を書き、立体図を加える。

紙はケント紙かトレーシングペーパー。鉛筆は5H.4H.3H.2H.H.HB.2B、消しゴム、ねりゴム、定規、コンパス、カッターナイフ、色鉛筆、筆、水彩絵の具、字消し板、ノギス。

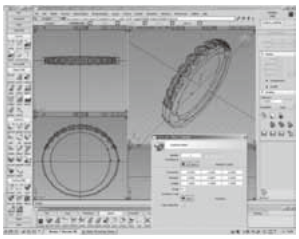
「コンピューターデザイン2D・3DCAD」

・2Dは2.5次元：CAD（コンピューター支援設計）+CAM（コンピューター支援製造）

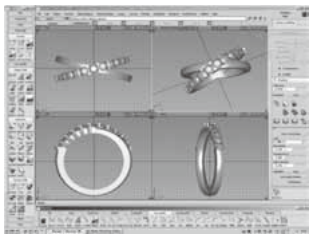
・3Dは3次元：光造形法によるデザインと制作

3D
光造形法による製造工程

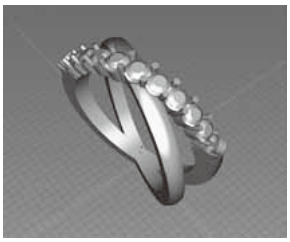
リングなど3次元が得意



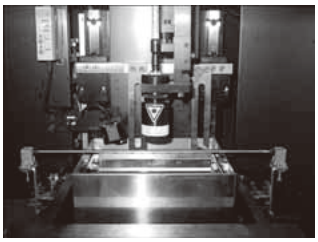
1.リングの基本部分を描き、ダイヤモンドのセッティングをする



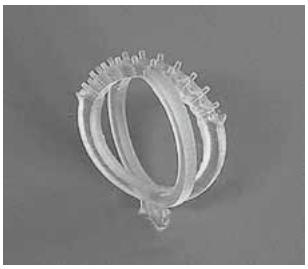
2.CAD図面の完成図のシェーディング図面



3.ダイヤモンドリングの完成図（CADのシェーディング画像）



4.光造形機の内部。画面中央の黒い筒状のものがレーザーヘッド。ここから樹脂の液面に向けてレーザー光を照射する



5.三次元で起こしたデーターを紫外線レーザーで硬化させた樹脂の立体モデルが出来る。これをゴム型作成。鋳造する

6.鋳造後、仕上げ、石留めしてリングの完成。
CAD+ロスト・ワックス・キャスティング法で量産する

5）ジュエリーデザイナーの分類：

プロダクトデザイン（量産）と一品制作

①デザイン画を中心に活躍

・企業内デザイナー。

・メーカーや小売店の注文に応じる自営のデザイナー。

②デザイン画と制作の両方をこなす

・自らデザインを描き、自ら制作するデザイナー。
（増えつつあり、これからの時代に期待が持てる）

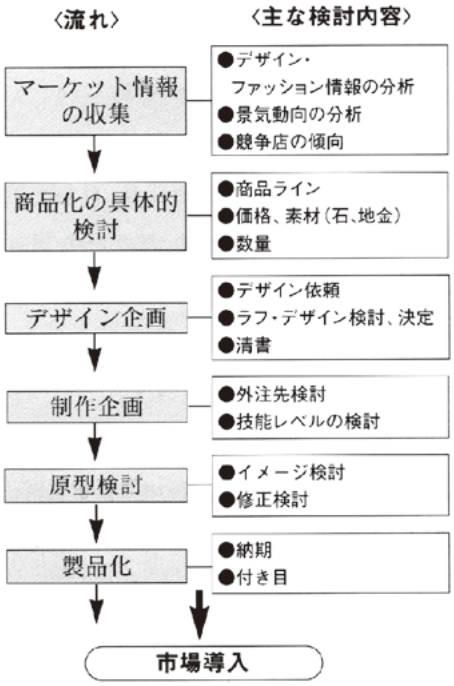
③作家タイプ

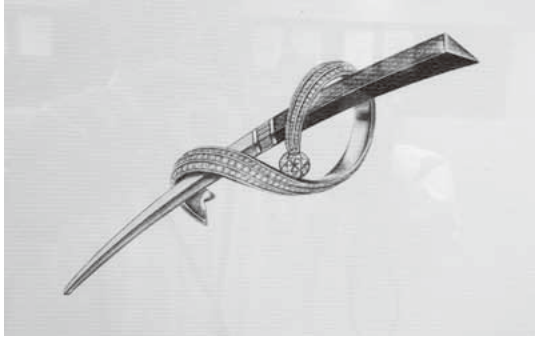
・アート性を加味したジュエリー作りするデザイナー。
（自ら在庫を持ち、デザイナー名を全面に出して業界の展示会等で販売する）

④商品企画から参加する（ディレクター的）

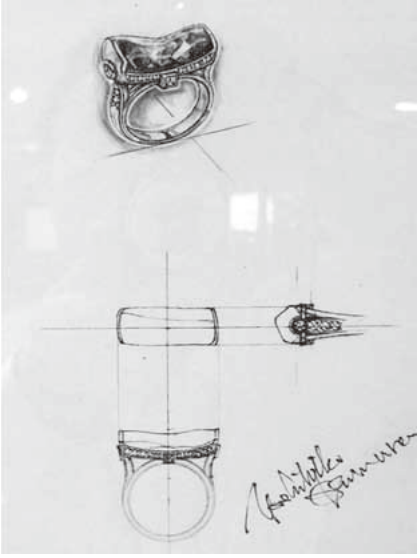
・商品企画の最初から参加し、商品コンセプトを作成し、デザイン画を描き、制作の指示管理をし、最終製品化のチェックまで関わるディレクター的デザイナー。
（図1参照）

図1：開発ポリシーと商品コンセプトの成立





55.企業内ジュエリーデザイナー藤田正ブローチ鉛筆着彩



56.（株）伊東商店デザイナー奥村佳彦
ボルダーオパールの一品制作のデザイン

57.（株）伊東商店エンゲージメントリング
プロダクトデザイン（量産）の代表的な商品。
デザイン画→原型制作（3DCAD）→ゴム型作り→ワックスパターンツリーの製作→埋没→鋳造→仕上げ→石留め→完成。とロスト・ワックス・キャスティング法を使用する。

6）彫金、鍛金の表現

「彫金」

○金属を彫って模様をつけたり、造形していく技法。板金細工、透かし、すり出し、寄せもの、打ち出し、平戸細工、象嵌、石留め、箱物などの技法がある。

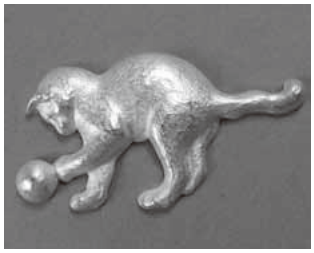
・ 金鎚、木槌、鏨（タガネ）、やに台、糸鋸（いとのこ）、やっとこ、金床、線引き板、ローラー、ヤスリ、ノギス、ピンセット、キサゲ、ペーパーヤスリ、ブローパイプ、リューター、洗浄器などを使用。

「鍛金」

○金属の展延性（展は広げる、延は伸ばすの意）を利用し、金床に当て金鎚、木槌やタガネで成形する工芸方法。

彫金と鍛金技法を併用してジュエリー制作が行われる。

58.彫金（毛彫タガネで葉脈を彫る）。K18、ダイヤモンド、サファィアブローチ・ペンダント



59.彫金（打ち出し技法）。おたふく金鎚、タガネ、やに台などを使用。ブローチ　2年生前期課題見本

60.彫金（透かし技法）。糸鋸、ヤスリを使用

61.鍛金（金床、金鎚、やっとこ、ヤスリを使用）プラチナ、K18、ダイヤモンドブローチ

62.鍛金（金床、金鎚、ローラー、線引き板を使用）。ろう付け技法にて組立。シルバーネックレス
1年生の後期課題見本

63.鍛金（金床、金鎚、ローラー、線引き板使用）。融かし・ろう付け技法、石留め　シルバー、タンザナイト、1年生後期課題見本

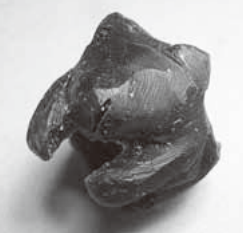
6）鋳金（ロストワックス）、宝飾の技法

「ロスト・ワックス・キャスティング法」

戦後アメリカで発達し、日本で昭和40年以降に隆盛した精密鋳造ジュエリー製作法。

この方法での特徴はゴム型の開発により量産を可能にし、ジュエリー製作の低コスト化に貢献。ファッション・ジュエリーの多くはこの製造方法である。

1.デザイン画作成



2.ハードワックスをプロペラヤスリで大まかに形を削り出す

3.彫刻刀で面取り造形して、大きな動きをつかみ表現する

4.ワックスペンと配合インレーワックスで微妙な肉付けをする

5.ワックス原型をシルバーに鋳造して、ヤスリ、タガネで補正をする

6.シルバー原型をゴム型作成し、ワックス取り、埋没、K18で鋳造後、模様部分をワックスで型取り

7.模様分部をプラチナで鋳造して、K18本体に、プラチナの模様パーツをろう付けする

8.目にイエローサファイア、身体にダイヤモンドを石留めするために0.8～1.0mmの穴あけをドリルでする

9.宝石を彫り留めして完成。K18、プラチナ、イエローサファイア、ダイヤモンド。特注.女性リング

「オーダーメード」（市場になく、注文主だけのオーダーメード）

制作工程

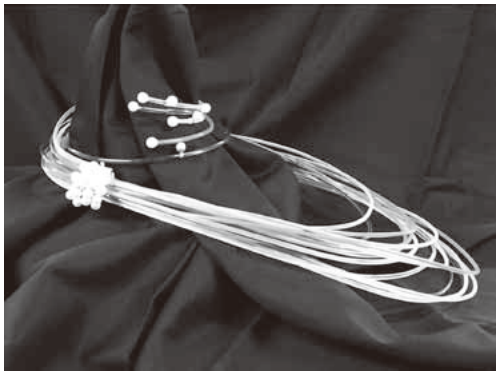
・ デザイン画、見積もり→承諾を受ける→原型制作（手作りorCAD）→原型の承諾を受ける→鋳造・メイキング→石留め、仕上げ、完成→鑑別書作成→納品

7）公募展、コンペティションの応募

・「日本ジュエリーアート展」（アート）各年
・「日本ジュエリーデザインコンペティション」（デザイン画）各年
・「日本クラフト展」（クラフト）毎年
・「ジュエリーデザインアワード」（宝飾、クラフト）毎年
・「伊丹国際クラフト展」毎年開催であるが、ジュエリーは各年
・「工芸都市高岡クラフトコンペティション」（クラフト）毎年
・「宇和島パールデザインコンテスト」（宝飾、クラフト）毎年
・「糸魚川翡翠ジュエリー・アクセサリーデザイン画コンテスト」毎年

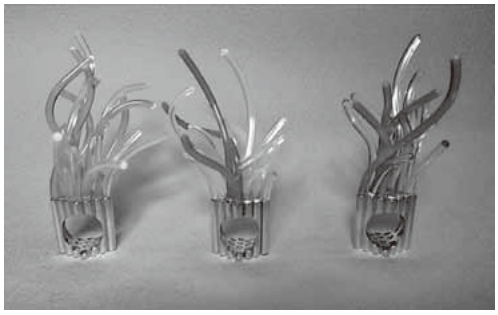
などのコンテストがあり、毎年もしくは各年で開催される。

参考の図録はジュエリーデザインコースの学生が在学中に制作して入選した作品で、伝統技法の応用や異素材の組合せの創造性、提案性、適正な技術のある作品である。



64.2009年第3回宇和島パールデザインコンテスト入選作「虹」ネックレス　シルバー、真珠、アクリル
ジュエリーデザイン2年生時　安ヶ平裕梨

65.公募2010日本ジュエリーアート展入選作リング
シルバー、赤銅、真鍮、銅　ジュエリーデザイン
3年生時　古谷衣里



66.2011年第50回日本クラフト展入選作「芽吹き」
リング　シルバー、アクリル　ジュエリーデザイン
3年生時　安ヶ平裕梨

8）まとめ

ジュエリー（装身具）の歴史から解説し、現代におけるジュエリーまでの大きな流れと今後の展開を期待し、ジュエリーとは何かをまとめました。

現代においては女性の社会進出が促進され、若者市場が躍進しています。それと、ジュエリーが社会性や財産的価値という見方から自由になり、異素材から貴金属・宝石まで幅広くデザインされ、使用される時代になりました。

ブライダルジュエリー、ファッションジュエリーにおいては異業種産業が加わり企画デザインにしのぎを削っています。生産においては自社関連の工場とか海外（東南アジア）に自社工場を持ち、企画のデザイン画を描いてから、CAD（キャド）：コンピューター支援設計でデザイン・原型制作を行い量産に結びつけています。一方、手作りの需要は高く、オリジナルジュエリーはアート指向とコンセプトがあるジュエリーデザインが好まれています。

今後も、政治と経済の影響を受けつつ、産業・文化に貢献するジュエリーデザインの創造とジュエリーの職業・教育に関わる人材が求められます。名古屋造形大学ジュエリーデザインコースでは産官学連携授業、公募展出品、資格取得などにより、社会に貢献できる人材を育成することが目標であります。

参考文献

・「日本の美術（装身具）」野間清六　編
・「日本装身具史」露木　宏=編・著
・「ジュエリーの歩み100年」関　昭郎、大橋紀生　編
・「ジュエリーコーディネーター検定3級」社団法人日本ジュエリー協会